

失われたテキスト「一九二八年三月十五日」の 伏せ字と削除の問題を中心に

ヤン ヒジン
梁 喜辰

一. はじめに

小林多喜二の「一九二八年三月十五日」は1928年「三・一五事件」を題材に、北海道で行われた日本共産党の検挙を扱った作品である。これは多喜二が1928年6月に起稿して同年8月に完成した作品であり、多喜二自ら本格的に文壇のデビューを果たした処女作だといっている。多喜二は『若草』（1931年9月、第7巻9号）の「処女作の頃を思う」という題で特集欄に掲載される「一九二八年三月十五日」が書かれる当時の様子を伝えている。「三・一五事件」直前の様子については、よく知られているように作品「東俱知安行」に描かれている。当時多喜二は銀行の仕事が終わったら毎日組合に行って普通選挙の手伝いをしており、多喜二はそこで「色々な「タイプ」の人達」と出会ったと言っている。しかし、普選が終わると「三・一五」の弾圧が起こった。多喜二は「今迄私には色々な意味から深い印象で刻みこまれていた人達が、何より私の手のとゞく直ぐ側からつぎへ／＼と引っこ抜かれて行く」のをみて衝撃を受けたと言っている。さらに多喜二は「私にとっては只事ではなかった。雪に埋もれた人口十五万に満たない北の国の小さい街から、二百人近くの労働者、学生、組合員が警察にくゞりこまれる。この街にとっても、それは又只事ではなかった」とこの事件の深刻さに気づいていた。そして多喜二は「警察の中でそれらの同志に加えられている半植民地的な拷問」に「煮えくりかえる憎意」を知り、「その時何かの顕示をうけたように、一つの義務を感じた。この事こそ

書かなければならない」のと言って、「あらゆる大衆を憤激にかり立てなければならぬ」ことを思ったと伝えている。多喜二が「三・一五事件」にどれほど衝撃と憤激を感じたのかよく分かる証言である。さらに多喜二は「私は一字一句を書くのにウン、ウン声を出し、力を入れた。そこは警察内の場面だった。書き出してからスラ／＼書いてくると、私はその比類（！）ない内容に対して上ツすべりするような気がし、そこで筆をおくことにした」と言うのをみても作品に対する多喜二の姿勢がどれほど慎重だったのかが窺える。^①

このように完成された原稿は蔵原惟人に送って、多くの伏せ字と削除が施された状態で『戦旗』1928年11月、12月号に分載発表される。「一九二八年三月十五日」が掲載される両号はすぐ発売禁止になる。しかし、戦旗社の独特な配布網によって多くの読者に読まれており、大きな反響を巻き起こした。多喜二はこの作品によって一躍すぐれたプロレタリア作家として世間に知られるようになる。だが、作品のなかで特別高等警察の残虐性を徹底的に暴いたために、特高に憎まれた多喜二は後に彼の不遇な拷問死に至るもっとも大きな原因を作ったと言われている。

前述したように、この作品の背景になっているのは「三・一五事件」である。1925年は日本の普通総選挙制が成立されており、労働組合と農民組合が中心になる社会主義勢力の議会を通じて社会改造を図っていた時期である。このようなプロレタリア運動の気運が高まっている情勢の最中、1928年2月20日男子25歳以上に選挙権が与えられた普通選挙による最初の総選挙で山本宣治など、労農党からの当選者2名を含めて8名の無産政党の代議士が当選した。当時、非合法活動を余儀なくされていた日本共産党は、この選挙から公然と活動をはじめたのである。しかし、これに危機感を感じていた田中義一内閣は選挙直後の3月15日に共産党を中心に一斉検挙を行った。この弾圧から多くの左翼系の人々が検挙されており、治安維持法違反で全国の逮捕者が3000人にも上っていた。その中で起訴された人たちは500人ほどである。さらにこの年の6月には議会で改正法案が成立しなかったために、田中内閣が発した緊急勅令

により治安維持法を改正して最高刑を死刑に変えた。これは当時の権力側が無産者階級運動に対し、いかに強硬な姿勢をとっていたのかが窺える事例である。権力側が敵対した対立階級である無産者階級を、もっとも有効に弾圧する装置として、暴力を伴う直接的な発動を用いたのである。

ここでは、多喜二の「一九二八年三月十五日」をめぐる蔵原惟人の下した「芸術的欠陥」という評価について探してみる。同時代のプロレタリア文学の陣営のなかに多大な影響力のある蔵原の評価であるが、果たしてそれが多喜二が蔵原に送った原稿「一九二八年三月十五日」というテキストに妥当な評価であったのだろうか疑問である。そしてこの問題を多喜二の原稿をめぐる蔵原や編集部の方せ字と削除の事例を取り上げて追及してみる。先にかけて述べるなら、中心人物達の内外的な心理変化の描写に対する同時代の偏った評価は、嚴重であった検閲の状況のなかに多喜二の原稿が、多くの方せ字や削除の状態で発表されたことと係わるのではないかと思われる。

二. 同時代評の形式と芸術的な欠陥への指摘、そして戦後の批判

「一九二八年三月十五日」における同時代評の中で、いち早くコメントを出したのは蔵原惟人である。蔵原は『戦旗』1928年11月号の「前哨戦」で、「一九二八年三月十五日」の芸術的欠陥にもかかわらず、「小さなエピソードとしてではなくて、大きな時代的スケールの中に描き出さうとした努力」があり、「プロレタリア文学の今後の発展に対する一つの重要な暗示」を含んでいるとその意義を評価している^②。ごく短いコメントであるが、蔵原の「一九二八年三月十五日」に対する評価の対象が文芸的な側面より、プロレタリア文学運動の側面から作品を評価しているのが分かる。

いったい、そこでコメントしている蔵原の考えていた「一九二八年三月十五日」の芸術的な欠陥というのは何を意味しているのだろうか。彼の芸術的な欠陥に対する指摘は、勝本清一郎が1928年12月4日『読売新聞』の「前衛戦に於ける作家達」で具体的に論じている。

勝本の「一九二八年三月十五日」に対する評価は形式的な欠陥、つまり、作品描写が常識的で多くの人物描写が十分ではないこと、構図や構成に穴があることなどを指摘していた。しかし、勝本がもっとも大きな欠陥として挙げているのは、「三・一五事件」という題材を、人物達（闘志や革命家達）の社会観や人生観などの変化を見せていないことだと言っている。この指摘と同様に、蔵原も 1928 年 12 月 17 日に同じことを主張していた。蔵原は同年の 12 月 17 日『都新聞』の「プロレタリア文芸の画期的作品」で、「最も大きい欠点はその主題の取り扱いそのものの中にある」と言っている。つまり、多喜二が「三・一五事件」を取り扱う際に、事件の犠牲になった人々の生活や心理などは見事に描いたものの、「事件」の前に大衆がいかに動いていたか、大衆がこの「事件」に対していかなる態度を取ったか、一それは作者によってつい闇の中に残されてしまった」と言っている。また、1928 年 12 月 2 日『都新聞』に、神近市子も「一九二八年三月十五日」の形式の常套性について述べている^③。

このように、「一九二八年三月十五日」における同時代評は、プロレタリア文学運動の側面としては高く評価されたものの、テキストの形式や芸術的側面からは、厳しい批判がなされているだけである。しかも当時の多喜二作品への本格的な評価は、当局の検閲や弾圧によってそれ以上行われることが出来なかった。実際、多喜二作品の殆どが国禁の書にされたため、彼の作品に対する文学的な評価が本格的に行われるのは戦後になるのである。

戦後になってから、瀬沼茂樹の「一九二八年三月十五日」と「東俱知安行」は、「一九二八年三月十五日」を「蟹工船」とともに、「誰も主人公がない」ことを特色とする當時のプロレタリア・レアリズムの代表作」として認めたと、多喜二は「三・一五事件」から「プロレタリアートの階級的主観に相應するもの」を発見し、これを非人稱的に客観的に描こうとしたが、その「事件の本質も意義も、遺憾ながら的確に把握すること」はできなかったと述べた。さらに「事実の本質とか意義とかを描くことを意圖」していなかった

と言っており、当時の社会の状況でそれが許されていなかったから、別の意図をもって「三・一五事件」という「歴史的事件」を作者自身の体験に即して、「この無産階級の解放運動の上に下された嵐を、小樽市における検挙、留置、取調、拷問、札幌の豫審廷へ護送までの過程において忠実に再現」すると同時に、またこの検挙が「この運動にしたがう大小さまざまな革命家、偽革命家たちに与えた影響、その家族の者の上におよぼした反応までも、冷静に惨酷に探求した心理過程を、併せて描こうとした」ことを「二重の過程」として書かれた「精刻なリアリズムとして成立」として論じた。特に、瀬沼は多喜二が「三・一五事件」を全国的事件の象徴として描くために、「作者ははじめから自己の分身である佐多を主人公とすることを放棄し複数の視點をとりあげるという困難な道についている」と指摘していることは重要な意義をもっていると思われる^④。

金達寿の「『一九二八年三月十五日』の描写について」は、「一九二八年三月十五日」の描写について二つに分けて論じている。一は「はじめの方の小川龍吉が逮捕される場所」と、二は「警察における拷問の場面」である。しかも、この描写は「意識の訓練」がされていない龍吉の妻お恵の視点である間接法と、龍吉が逮捕される場面の娘幸子の視点である直接法で「リアリティ（現実性）のある確な描写」として捉えており、龍吉の警察に引き立てられる場面の描写から志賀直哉の影響を指摘している。しかし、金達寿の多喜二と志賀直哉との関係についてもう少し補足が欲しかったのも事実であろう^⑤。

佐藤静夫の「一九二八年三月十五日」は、作品をめぐる歴史的な時代背景を指摘していることに注目したい。佐藤は1927年の金融恐慌をはじめ、深刻化する不景気のなかに労働者や農民の苦しい生活のための労働争議、小作争議などの事例、また「絶対主義天皇制政府権力」の中国大陆への侵略など当時代の様子を述べたあと、1928年前後を「日本文学のひとつの転機をなしていた」時期として認めている。佐藤が言っているその転機というのは「大正文学の主軸をなした『私』小説的文学観念をいかにして超えるか、という問題の転機」

として捉えている。佐藤はその転機の表徴として、「ひとつは二七年の芥川龍之介の自殺であり、ふたつは二八年の新感覚派の同人誌「文芸時代」の廃刊」をあげている。芥川の自殺は「新しい時代の激動と新文学の高揚を目前とした、人生と文学にたいする鋭感な感受性と誠実さとにみちた一小市民的インテリゲンチアの自我の「敗北」にほかならなかった」と言っており、またそれは1922年の有島武郎の「宣言一つ」も「大正文学の主軸のひとつとしての「私小説」的、心境小説的旧文学観からの離脱の困難を、自己限定によって「宣言」した」ものだと述べる。この旧文学の克服の現れは、1924年6月の「文芸戦線」の創刊、同じく10月に金星堂からの「文芸時代」であったという。新感覚派の中心的雑誌である「文芸時代」は、「第一大戦後ヨーロッパにおこった未来派、ダダイズムなどの文学に刺激をうけた近代主義的芸術派の文学」であったが、その中心的な雑誌「文芸時代」は1928年に廃刊となり、新感覚派はその通俗化と言われる新興芸術派にながれる。しかし、もう一つ旧文学の対抗としての「文芸戦線」は、「一九二五年一二月の日本プロレタリア文芸聯盟結成、二六年一月のマルクス主義に統一された組織改変と日本プロレタリア芸術聯盟への改称をへて、プロレタリア文学運動の理論と組織の発展を支える」ことになるのだと述べている。このような日本文学の流れのなかに、多喜二の「一九二八年三月十五日」が、「「芸術派」の通俗化と、プロレタリア文学の高揚という分水嶺に当たる年」に発表されることに意義を与えている。当時代の転換と激動、そして階級的な対立が顕著になっている最中、その社会と人間の真実をリアルに捉えるためには「ブルジョア的、小ブルジョア的世界観と、そこにもとづく社会・人間についての文学観」ではなく、「一九二八年三月十五日」のような作品がその実行としての新側面があるのだと評価した。これは作品をめぐる当時代の歴史的な背景だけではなく日本文学史を射程においた論であり、ややもすればプロレタリア文学が「政治と文学」というカテゴリーのなかに論じられがちな今日においても意味ある評価に違いない^⑥。

右遠俊郎の「一九二八年三月十五日」論—知識人の問題を中心に」は、蔵

原惟人の「戦闘的プロレタリアートの観点」により、多喜二の「半植民地的な拷問」への憤激に密集しすぎて、「一九二八年三月十五日」における「三・一五事件」の取り扱いに「無産者運動との連関の中におき得なかった」という評価に、右遠は妥当ではなく過酷すぎると批判しながら、当時の「天皇制政府とその警察の、不法な検挙と残虐な拷問を描き切ったこと」を高く評価した。特に、右遠は「登場人物の多数に視点を定めた多元性」に注目し、「一九二八年三月十五日」が「相互批判の多角形によって成立」していると述べている。右遠は「一九二八年三月十五日」に彼自分の投影として「知識人の問題」を探っており、作品の中に龍吉と佐多を取り上げて「プロレタリア運動」にかかわる知識人の姿勢と厳しい現実の中に葛藤している様子を分析し、反民主主義的な反動攻勢の強い1970年代に、「民主主義的な変革」を考える「知識人の問題」として論じたのである。文学批評を単なる観念的なものではなく、反動的な世界の情勢のなかに知識人の役割について真剣に考えている論調だと思われる。^⑦

壺井繁治の「「一九二八年三月十五日」の主題を中心として」は、多喜二の作品について「最も大きな欠陥はその主題の取扱い」であると批判した蔵原に、壺井は「「題材」と「主題」との混同」をしていると指摘している。壺井は蔵原の「三・一五事件」という一つの題材を「無産者解放運動との連関」で「主題化する」ことは、「一つの題材には一つの主題しかない」ことの誤りだと述べている。蔵原のプロレタリア前衛として、現実を「無産者解放運動との連関」に描かなければならない考え方に、壺井は多喜二の「三・一五事件」の文学的形象化において、「天皇制廃止」を「政治的綱領」にあげていた当時共産党の「党と大衆との結び目を描くこと」ではなく、「大衆の基礎を持ち得なかった」当時共産党の支配階級に攻撃される過程のなかに「一つの闘争の頂点としての拷問の場面、それに屈せず立ち向ってゆくそれぞれの革命的人物の姿勢、その人間内面のさまざまな感情、心理までも描き切る点」にあるのだと言っている。壺井は蔵原の教条主義的な文学観は彼自身の「プロレタリア・レアリズムの道」によることを指摘したが、彼の論文のなかにもっとも意味ある

言説は、蔵原が岩波文庫版『蟹工船 一九二八年三月十五日』の「解説」（1950年8月4日）で、多喜二の「一九二八年三月十五日」の原作の最後の二章を削除した事実を認めたことを指摘して、多喜二の作品に「主題の分裂が見られた」にもかかわらず、「階級闘争の激突の一頂点としての拷問の場面を描き切ることに主題がしぼられている」と論じている。その意味で蔵原によって削除されてしまったこの作品の最後の場面である「監獄デモ」や外部の共産党再建のためにたたかう闘争の二章の役割がいかに重要な意味を持っているかが分かる^⑧。

小笠原克の「小林多喜二の《処女作》——「一九二八年三月十五日」の周囲——」は、「一九二八年三月十五日」の成立をめぐる作品の背景を丁寧に追求した論文である。主に蔵原の多喜二に語った内容に関する「蔵原惟人＝小林多喜二の相関を吟味」することを中心に論じている工藤忠彦の「多喜二揚棄—蔵原惟人との出会い」（『奥文論藻』第6号、1973年6月）を触れながら作品の成立における綿密な論及は興味深いものであるが、それはさておきここで注目したいのは小笠原の壺井と同じく作品の最後の二章に関する蔵原の見解に対する批判である。前述した壺井の論文は「一九二八年三月十五日」の削除部分であるノート稿を消滅という前提で書かれていたが、小笠原のはすでに布野栄一による発見と紹介によって蔵原による削除の部分がある程度は確認してからの蔵原の多喜二批判への批判である^⑨。作品の最後の二章をめぐる議論はまた別のところで詳しく論じることにしておきたいが、作品が発表された同時代から多喜二文学の多大な影響のある批評家の一人である蔵原のある意味で一義的に思われる評価に対する多義的な再評価にちがいないのである^⑩。

奥村徹行の「一九二八年三月十五日」は、作家ならではの感受性豊かな論である。奥村はここで「お恵の淋しさ」について論じており、その場面として検束された龍吉の妻であるお恵が、組合書記である工藤宅を訪れて検束が広い範囲で行われたことを知らされた後に賑やか大通りを歩く場面を採り上げる。「今、この同じXXの市で、あんなに大きな事件が起き上っている。然し、そ

れと此処は何んという無関係であろう」という場面で、お恵は「変に淋しい物足りなさを感じ、暗い気持ちになる」のだが、奥村はここで「生活というものは、政治的経済的社会的基盤の形成と獲得にむかうことをつうじて、はじめて人間性を奪回する」のだと述べている。展開として論理性の乏しい感想に近いものに思われるが、奥村の考えは多喜二文学を読む一つの方法として意味を持つかもしれない^⑪。

島村輝の「権力と身体」は、「支配階級の強制装置として権力」の「直接かつ具体的な暴力の発動」として「軍隊や警察」と捉えており、「同時代の表現者たち」の「身体的な感覚から対象をとらえることによって斬新なイメージを可能にした反面、類型的な表現を抜け出すことができなかった」といっており、その理由は「その表現を生み出した発想の根拠をつきつめていくことができず、表現する主体が一種の安全地帯に身を置くことによって、階級間の厳しい対立を描き得なかった」ことだと述べる。そして島村はそれが「一九二八年三月十五日」の拷問場面などを表現することができなかったといっている^⑫。

松澤信祐の「多喜二と蔵原惟人——「一九二八年三月十五日」と「党生活者」」は、多喜二への蔵原惟人の影響関係を中心に論じている。松澤はプロレタリア文学が「労働者階級の解放をめざす革命的文学の創造を目的」としており、その「指針となるべき革命理論に導かれることは当然」であるとしている。さらに、プロレタリア作家というのは「単に一個人の好みや感情によって作品を創作するのではなく、プロレタリア前衛の有機体の一翼を担って、自己の創作能力を生かしているのだという階級意識に立っていた」のだと記した。また松澤は、蔵原惟人の「プロレタリア・レアリズムへの道」が多喜二に及ぼした影響は、「個人重視のブルジョア文学における小説家と評論家の関係を遙かに凌駕した有機的關係」として評価しながら、如何に蔵原によって多喜二が「『午後四時』の循環小数」的ボヘミアン生活と決別、プチブル的な個人的心理や原始的欲望を扱う文学世界を打開し、「一九二八年三月十五日」のような「階級闘争の最も強烈な闘いの場である弾圧事件」を書いたのかを明らか

にした。プロレタリア作家と評論家の生産的な関係、つまり「感動的な弁証法の典型」として「一九二八年三月十五日」と「党生活者」を論じながら追求したところは興味深いところであろう^⑬。

ノーマ・フィールドの『『一九二八年三月十五日』——拷問・革命・日常性』は、特に「事件の発端で女性と子どもの視点を重視」しており、この作品を「勇敢なプロレタリアートや戦闘的スローガンからなりたっていない」ことであり、「登場人物が内包する矛盾や相互の緊張関係」に注意すべきだと述べている。さらに労働階級のすぐれた指導者の一人である渡をめぐる「拷問と日常性」に関する言説は目を引くところがある。渡のぬきんでる行動のなかに「無産階級が資本家から受けている圧迫」という拷問の価値を見つけている。日常に蔓延している「肉体的苦しみ」や「特権によって隠蔽される精神的な圧迫」のなかに見出した渡の日常性である^⑭。また同氏の『小林多喜二——21世紀にどう読むか』で、拷問の場面における伏せ字と削除の問題をとりあげているのに重要な意味があろう。蔵原や編集部（立野信行）によって伏せ字や削除された『戦旗』のテキスト（1928年11、12月）における「当時の読者」の読みへの疑問をめぐる言説は考えさせられる部分がある。これに関しては後に細かく論じることにする^⑮。

以上のように、「一九二八年三月十五日」における同時代の評価と戦後から現在までの研究史の概略をみたが、同時代から戦後になってからも蔵原の影響力は大きかったのがわかる。戦前当局の国禁の書として扱われた多喜二の作品は、戦後になってからやっと本格的に評価されることになる。しかし、いまだに「一九二八年三月十五日」というテキストにおける蔵原の影がみられるのはなぜだろうか。それは「一九二八年三月十五日」の発表をめぐる蔵原と『戦旗』編集部の伏せ字や削除の問題が残っているからだと考えられる。次は作品における伏せ字や削除がどのような問題をもたらしたのかについて、権力の本質と暴力、そしてそれをうけている渡の対応について論じながら、多喜二と蔵原、『戦旗』編集部の間にある微妙なずれについて探してみる。

三. 拷問の形象化における伏せ字と削除の問題

前にも述べたように「三・一五事件」は、権力側がその敵対階級である無産者階級に対する扱いがどれほど残酷だったのかを明らかにした事件である。この事件を題材に書かれた多喜二の「一九二八年三月十五日」は、無産者階級運動に対する権力側の検挙や拷問などの弾圧、それに抗して闘う闘士たちの対立構図になっている。物語の中心になっている一つの大きな柱として、テキストのなかに弾圧する側として登場する「権力」がある。テキストの中で暴力を振るう主体である「権力」の属性は物理力として表れている。島村輝はマルクス世界観から、対立階級に対する権力の姿勢は、「階級支配の強制装置」として「軍隊や警察」を「直接かつ具体的な暴力の発動」だと述べている。

階級支配の強制装置として権力をとらえるマルクス主義の世界観から見た場合、軍隊や警察は、それが直接かつ具体的な暴力の発動となってあらわれるだけに、最も分かりやすい権力の姿であるといえる。そしてそれが一番明白に感じられるのは、闘争に参加している者の身体に、彼らの暴力が直接にふるわれた場合である。身体を権力の装置によって直接浸される、それを描くことによって自由の侵略と抑圧を表現するというのは、何も多喜二に限ったことではなく、それまでのプロレタリア文学の表現の中にもしばしば見られる発想である。¹⁶⁾

さらに島村は、上野壮夫の「進行する列の中に」と多喜二の「一九二八年三月十五日」の拷問場面を同等の表現の地平から、「「おれ」の身体を媒介」に、「権力の無法と仲間への連帯」を「身体論的構図の中」ととらえている。両者を「類型的な発想を基盤」として把握しているのが窺える。しかし、このような発想の基盤の「類型化」は、「一九二八年三月十五日」の拷問場面の表現を「類型化し制度的言説」にしたのではないかといっている。

同時代の表現者たちが、身体的な感覚から対象をとらえることによって斬新なイメージを可能にした反面、類型的な表現を抜け出すことができなかったのは何故か。結論を先取りするならそれは、その表現を生み出した発想の根拠をつきつめていくことができず、表現する主体が一種の安全地帯に身を置くことによって、階級間の厳しい対立を描き得なかったからである。そのとき、表現者たちの主観の如何にかかわらず、表現は類型化し制度的言説となって、あの拷問場面のような表現を生み出すことをはばむ、一種の〈権力〉と化す。そのことは、当時の無産者解放運動の底流となっていた、安易な楽天主義と無関係ではない。¹⁷⁾

つまり島村は多喜二の渡の英雄主義的な形象は、「同時代の活動家たちの発想から完全に自由」ではなかったところがあると評価している。しかしながら、多喜二の作家としての本質は権力側の「虚構」を「事実」としての強要に対し、抑圧される側としての「虚構」を作り上げて「事実の姿」を明らかにする力だと認める。

権力側が、その言説を用いて大きな虚構を作り上げ、それを「事実」として通用させようとするならば、その権力の言説のリアリティーを打ち壊すだけの力を持った「虚構」を作り上げることで、抑圧される側からの事実の姿を明らかにしなければならない。この年を境にした弾圧の質的な転換を、頭の中での理解としてでも、空虚なスローガンとしてでもなく、キリキリと身体に迫ってくる痛みの感覚として表現したところに、「一九二八年三月十五日」という小説の、同時代の水準を一步抜きん出た特徴があるのだ。¹⁸⁾

多喜二が人々の間に論じられる際、今まで彼の作品に意図的に採り入れた強固な党派性のために、作品は文学として評価されておらず、いつもその政治的

なメッセージに目を向けるようになっていた。しかし、島村も指摘したとおり多喜二の「虚構」を作り上げるその才能と作品は、多喜二を活動家という一面的な偏見を越えて、権力側の厳重な検閲などの隠蔽によって隠された作者としての側面を我々に見せている。

ノーマ・フィールドは「一九二八年三月十五日」の拷問描写について、多喜二がいかにこの作品を書く際、慎重に描いていたかを紹介しながら、「労働階級のすぐれた指導者」である渡の運動と拷問に対する姿勢を「日常性」との関係で把握している。特に、ノーマ・フィールドは拷問を受けている活動家のなかで、テキストの主要人物として描写されている労働者出身の渡に注目し、「拷問と日常性」の「身体表現」に焦点をおいてテキスト分析を行っている。テキストのなかで渡は独房を休息の場として考えており、独房を歩きながら放屁する彼を、ノーマ・フィールドはその身体表現が誇張されているのではないかと述べている。この「日常性を軽んじた英雄主義」にも考えられる描写をどう捉えるべきだろうか。ノーマ・フィールドはそれを「耐え難い日常」を覆す想像、つまり、「革命」という想像から喚起される恐怖が渡を拷問に対して、まるで英雄主義にも思われる楽観的な余裕を保たせたと示している。

確かに渡は抜きでている。したがってこの作品は日常性を軽んじた英雄主義に陥っているのだろうか。はじめに登場してくる女性は後半姿を消してしまう。警察の壁は作品内の壁でもあるのだろうか。いや、夢や制御できない身体の動きで繋がれているのではないか。妻や娘や母親の「顫え」は自らの恐怖の表現であり、共感作用でもある。その恐怖とは、いかに耐え難い日常であっても、それを覆すことを想像するだけで引き起こされる衝動である。「革命」ということばが喚起する恐怖である。だからこそ渡は拷問に価値を見出そうとしたのだ¹⁹。

渡は独房のなかを休息の場として受け入れようとしても、その壁のなかで彼

の身体に行われる拷問という暴力を恐れている心理が分かる。ノーマ・フィールドは、渡の「英雄主義」的な拷問認識を「耐え難い日常」を覆す「革命」への想像から来る認識として捉えている。果たしてそうだろうか。仮にそれを認めるとしてもテキストのなかに描かれている渡の人物像は一面的な描写にしかっていないのではないか。しかも、そのような一面的な渡像がノーマ・フィールドの渡の分析を導いたと思われる。なぜ、そうってしまったのだろうか。

ノーマ・フィールドも指摘したように、ここで考えなければならないのは「伏せ字」と「削除」の問題である。作品の発表当時に官憲の厳しい弾圧を受けていたプロレタリア文学運動の状況で、作品発表のために伏せ字や削除を余儀なくされたことはよく知られている。当然ながら「一九二八年三月十五日」も検閲から逃れることができなく、編集部の検閲対策として、多喜二の原稿は蔵原や編集部により相当な伏せ字や削除が行われた。そのなかに渡の拷問に対する「英雄主義」的な認識場面も含まれている。ノーマ・フィールドは「一九二八年三月十五日」における伏せ字と削除の問題の重要性には認識しているものの、「一九二八年三月十五日」の完全ではない初出テキストを読んだ同時代読者の歪んでしまうテキストイメージの発生可能性についてはっきりした見解を示していない。しかし、これは前にも述べた同時代評の形式と芸術的欠陥という指摘と関係があると考えられる。蔵原また同時代の批評家も考えていないのは多喜二が蔵原に送った原稿のことである。蔵原は送られた多喜二の原稿を見たはずだが、蔵原の芸術的な欠陥という評価というのは『戦旗』の初出に対する批判ではないか考えられる。

当時の読者は二文字のX Xは「拷問」とわかっただろうが「(〇〇文字削除)」、ましてや、「(〇〇行削除)」となると、よほど生々しい内容だろう、と見当はついても具体的にはわからない。さらに、編集部が無表記で削除した箇所は全く意識されない。／これはどういうことになるか。まず、事件後ほぼ一ヵ月は報道規制のため、一般に何が起こったのか、ほとんど知

られなかった。規制が解除されても、拷問の実態が伝えられるわけではない。(労農党代議士・山本宣治が衆議院予算委員会で拷問について政府を問いただしたが、政府側はきっぱりその事実を否定した。翌年、最高罰を死刑に引き上げた治安維持法改正に反対した山宣は、右翼に刺殺されてしまう。)²⁰

「一九二八年三月十五日」の初出における伏せ字や削除の問題を指摘したノーマ・フィールドも、ここで渡の英雄主義という一面性から、多喜二が描きかけた削除された多面的な渡の像の究明までには至らなかったと思われる。

『全集』の「解題」は蔵原による削除以外にも、『戦旗』編集部による加筆とさらに削除七箇所、また「主として」検閲を考慮した一三カ所の削除が指摘されている。(後者は一九二九年、『蟹工船』の附録として単行本に収録されたとき復原された。すぐ発禁になったが、半年で一万五〇〇〇部売れて、多喜二は一〇〇〇円の印税のうち一〇〇円以外は戦旗社に寄付した。)この一三カ所にも「以下何行削除」と明記されているものと無表記のものがあり、また医者が参加する工藤の拷問場面のように、明らかに検閲対策である箇所もあれば、そうとは思えない箇所もある。先に挙げた渡の「闘志」についての考えも後者のひとつで、編集部が前半から削除した、工藤が家族を案じる気持ちを乗り越えられないことや、蔵原が削除した二章のうちに龍吉の幹部批判が含まれていることなどと合わせてみると、運動側の不安や、労働者とインテリゲンチヤの緊張関係に触れた箇所が多いような気がする。それは作品にとってのみならず、運動にとっても残念ながら、弾圧からくる余裕のなさを物語っているのだろう。²¹

ノーマ・フィールドが挙げている「一九二八年三月十五日」の伏せ字と削除の問題を論じる前に、まず、この作品の初出から現在に収録されている全集ま

でに至る大まかな過程を見ておく必要がある。「一九二八年三月十五日」における伏せ字と削除の問題は、既に黄奉棒「小林多喜二「一九二八年三月十五日」」^②で指摘されており、ここでは黄の指摘を踏まえて、小林多喜二全集を参考に、その大まかな流れを記してみる。順番は次のとおりである。

一、初出『戦旗』1928年11月（1～4章）、12月（5～9章）に分載発表されるが、両号とも発売禁止になる。原稿は蔵原と編集部の見解によって削除された部分が多くある。蔵原の見解によって削除された部分は、原稿の最後の部分に付け加われている説明的だと評価された5、6枚の付記である。編集部によって削除された部分は七カ所であり、検閲のことを考え十三カ所が削除される。また、多くの伏せ字と部分的な加筆が確認される。^③

二、1929年9月に戦旗社発行である日本プロレタリア作家叢書の第2編『蟹工船』（四六版仮綴222頁に収録。この版は初出の十三カ所の削除と伏せ字を全部復原したものである。これは戦前刊行されたもののなかでもっとも原作に近いと言われている。最後の13行の落書きが最初の「三月十五日を忘れるな」だけになっている。発売禁止になる。

三、1930年5月に「一九二八年三月十五日」の単行改訂（四六版仮綴96頁）が、日本プロレタリア作家叢書第九編として戦旗社から出版される。最後の壁の落書きは復元されるが削除も多く見られる。発売禁止になる。

四、1935年にナウカ社版全集第三巻に不完全な形で再録される。戦前は「国禁の書」として扱われた。

五、戦後、1946年に新興出版社版『一九二八年三月十五日・党生活者』で復刊される。これは戦旗社版初版本を底本にしたものである。

六、1948年9月に日本評論社版『小林多喜二全集』の第2巻に、はじめて原作に復原される。これは全集編纂委員会の方針により、勝本清一郎が所蔵していた原稿をもとに勝本による校訂がなされていた。この版から現代仮名づかいや送り仮名がいくらか整理される。最後の壁の落書きの二行目の「共産党 万歳！」にある作者の注を抜く²⁴。これ以来、各種の版本はこの全集が定本にされている。

七、1982年に日本評論社版を定本に、岩波文庫版とノート稿を参考にして、新日本出版社版『小林多喜二全集』の第2巻に収録される。

ノーマ・フィールドが「一九二八年三月十五日」における伏せ字と削除の問題として、すでに述べている所で渡が取調べで拷問される場面がある。伏せ字や削除がされたまま発表された初出のテキストと、ノート稿をもとに原稿に近く復原された現在の全集のテキストを理解するために引用してみる。

渡は、だが、今度のには×××た。それは（以下二十四字削除）[空白一筆者]彼は強烈な電気に触れた矢うに、（以下六十六字削除）[空白一筆者]、大声で叫んだ。／「XX、XX一え、XX一え!!」／それは竹刀、平手、鉄棒、細引でなぐられるよりひどく堪えた。／渡は、XXされてゐる時にこそ、始めて理屈拔きの「憎い一ツ!!」といふ資本家に対する火のやうな反抗が起つた。XXこそ、無産者階級が資本家から受けてゐる圧迫、搾取の形そのまゝの現われである、と思った。／XX XX 毎に、渡の身体は跳ね上った。²⁵

渡はだが、今度のにはこたえた。それは畳屋の使う太い針を身体に刺す。一刺しされる度に、彼は強烈な電気に触れたように、自分の身体が句読点位にギョーンと瞬間縮まる、と思った。彼は吊るされている身体をくねらし、

口をギョーンとくいしばり、大声で叫んだ。／「殺せ、殺せーえ、殺せーえ!!」／それは竹刀、平手、鉄棒、細引でなぐられるよりひどく堪えた。／渡は拷問されている時にこそ、始めて理屈抜きの「憎いーッ!!」という資本家に対する火のような反抗が起こった。拷問こそ、無産階級が資本家から受けている圧迫、搾取の形そのまゝの現われである、と思った。渡は自分の「闘志」に変に自信が無くなり、右顧左顧を始めたと思われるとき、何時でも拷問を考えた。不当に検束され、歩くと目まいがする程拷問をされて帰ってくると、渡は自分でも分る程「新鮮な」階級的憎悪がムチくと湧くのを意識した。その感情こそは、殊に渡達の場合、マルクスやレーニンの理論を知って「正義的」な気持から運動に入ってきたインテリゲンチヤや学生などの夢にも持てないものだ、と思った。「理論から本当の憎悪が風のように湧くかい!!」渡と龍吉はこの事で何時でも大論争をやった。――／針の一刺し毎に、渡の身体は跳ね上った。²⁶

初出を原稿のまま復元されたと考えられる全集のテキストと比較して見れば分かるように、初出のテキストからは、なぜ渡が拷問に対し「日常性を軽んじた英雄主義」的な認識を持つようになったのかははっきりしていないのが分かる。渡にとって拷問は「無産階級が資本家から受けている圧迫」であり、運動に対する自信が無くなるとき、歩きさえろくに出来ないくらい拷問されたことを考えることで、「「新鮮な」憎悪」を意識する作用として働いている。削除された生々しい拷問の場面には、渡の無産者階級運動に対する意識の流れがはっきり表れている。渡のこのような意識の流れを考えると、渡の行動を単なる英雄主義的行動だとは言いがたいのではないだろうか。活動家である渡がいかなる過程を経て、資本家に対する憎しみと戦いへの意志を表したのかが理解できる。

さらに、ここで逃してはいけない重要な事実を指摘しなくてはならない。それは前述した初出から現在の全集に至る過程の一に記したように、現在の全集にも載せられていない、蔵原によって削除された5、6枚の付記のことである。

全集のノート稿に付記の原型と推定される二つの文章が残されている。ここで注目したいのは、龍吉の視点から渡の英雄主義的な行動を分析、批判している場面である。

初め、彼はそれが、どうしてだか分からなかった。そのうちにフト、何でもない時の渡等の話から、彼等幹部が案外組合員の教育を喜んでいない事に気付いた。階級戦線上の闘志である彼等も、組合員が教育され、その結果、何か、自分達の地位がそのためにおびやかされるのではないか、はっきり意識的ではなかったかも知れないが、本能で喜んでいなかった。龍吉は、「独学的」な英雄主義が徹底的に排撃されなければならない「俺達の運動」にも、こんな事があるか、と思い、淋しくされた事があった。²⁷⁾

「一九二八年三月十五日」は、登場人物の一人であるお恵の視点から始まり、十人あまりの人物に次々視点を移しながら書かれた「多元的な構成」によって成り立っていたと評価されている。²⁸⁾ 初出と現在の全集を比較してみた際に出した引用で示したように、渡の視点からは渡の「英雄主義」的な拷問認識が、ノート稿の付記からは龍吉の渡の「独学的」英雄主義」を批判している。前述から考えられることは、もし多喜二の蔵原に送った原稿に、蔵原や編集部の独断的な伏せ字や削除が加えられなかったら、渡の形象は一面的な「英雄主義」のイメージに止まらず、もっと多面的な渡の像が形成されたのではないだろうか。これについて多喜二自信も、日本プロレタリア作家同盟の機関紙『プロレタリア文学』（1932年3月、第1巻第3号）の「私は三・一五を如何に描いたのか?」という欄に掲載された「一九二八年三月十五日」の経験」に話している。多喜二は「三・一五事件の持っている歴史的階級的意義はチツともそんな処にばかりなかったのである」のだけ言っており、それが結果として大衆に恐怖を起こせたと自評している。そして多喜二は「切取った最後の二章があった方が、幾分でもその決定的な欠陥を補い得たかも知れない」のだ述べている。

これを見ると多喜二自身も「一九二八年三月十五日」の構成の問題を考えると、やはり最後の二章は削除されるべきではなかったと感じている。多喜二の惜しい気持がよく窺える問題である。

四. 結び

以上、当時プロレタリア文学に対する暴力的な弾圧、そしてそれを受けているプロレタリアートの時代的な限界がそこにあったのは事実である。だが、プロレタリア文学陣営の蔵原と『戦旗』編集部の独断が多喜二のテキストに加わったことも否定できない事実であろう。そこには多喜二自身も予想しなかった同志たちの硬い教条主義が潜んでいたのかもしれない。「一九二八年三月十五日」における伏せ字と削除の問題は、当時の権力側による無産者階級に対する敵対的な政策から逃れるために、やむ得なく行われた側面があったと考えられる。プロレタリア文学をはじめ、小林多喜二文学に対する権力側の意図的に行われた弾圧と隠蔽は、当時の読者に多喜二の作品を原型の形で接することを妨げたのである。作品のなかに登場する重要な人物である労働者出身の渡の独断的な英雄主義イメージの歪みも、結局、権力側の検閲とそのために内部検閲とも言える蔵原と『戦旗』編集部の伏せ字と削除が原因で生じた問題であると考えられる。そのため当時の読者はテキストから得られる情報が限定されてしまった。そのため戦前に行われた蔵原の「一九二八年三月十五日」に対する形式や芸術的欠陥という批判も無理があったと思われる。この問題は、今まで述べてきたテキストの伏せ字や削除の問題を見てもわかるように、蔵原をはじめ、プロレタリア文学陣営の責任と誤解があったかもしれない。

[注]

- ①『小林多喜二全集』、第5巻、新日本出版社、1982、292～296頁。以後、『小林多喜二全集』からの引用や参考は『全集』に表記する。
- ②『戦旗』、1928年11月、113頁。
- ③神近市子、「マルキシズム入門書二三 - 活躍した新作家三氏」、『都新聞』1928年12月2日。

- ④瀬沼茂樹、「一九二八年三月十五日」と「東俱知安行」、『小林多喜二研究』、開放社、1948年、33頁～51頁。
- ⑤金達寿、「『一九二八年三月十五日』の描写について」、『年刊多喜二・百合子研究』第2集、河出書房、1955年、122頁～129頁。
- ⑥佐藤静夫、「一九二八年三月十五日」、『小林多喜二読本』、啓隆閣、1970年、72～85頁。
- ⑦右遠俊郎、「『一九二八年三月十五日』論——知識人の問題を中心に」、『民主文学』、1972年3月、参考は『小林多喜二私論』、本の泉社、2008年、75～98頁
- ⑧壺井繁治、「『一九二八年三月十五日』の主題を中心として」、『文化評論』、139号、1973年2月、33～41頁
- ⑨小笠原は論文のなかで、「一九二八年三月十五日」の蔵原によって削除された資料的な問題は「解決済み」であると言って布野栄一を紹介している。布野の多喜二ノート稿の発見と紹介については「小林多喜二の新資料小考」、『文学』、26-9、1958年9月と『定本小林多喜二全集 第3巻』（1968年）の「解題」に詳細が記されたといっている。後に、布野の論文は『小林多喜二の人と文学』（翰林書房、2002年）に「小林多喜二の遺稿断片」の題に収録されている。しかし、これは蔵原に送った多喜二の原稿ではない。もとの原稿は焼失したと言われている。これに関しては壺井繁治の前掲論文に言及しており、またノーマ・フィールドの『小林多喜二—21世紀にどうよむか』（岩波新書、2009年、143頁）も再確認している。
- ⑩小笠原克、「小林多喜二の《処女作》——『一九二八年三月十五日』の周囲——」、『国語と国文学』、1975年4月、120～132頁。
- ⑪奥村徹行、「一九二八年三月十五日」、『民主文学』、207号、1983年2月、99～102頁。
- ⑫島村輝、「権力と身体」、『講座昭和文学史 第一巻 都市と記号』、有精堂、1988年。参考は島村輝、『臨界の近代日本文学』、世織書房、1999年、253～266頁。
- ⑬松澤信祐、「多喜二と蔵原惟人——『一九二八年三月十五日』と「党生活者」」、『民主文学』、1988年10月。参考は『小林多喜二の文学』、光陽出版社、2003年、171～187頁。
- ⑭ノーマ・フィールド、「『一九二八年三月十五日』——拷問・革命・日常性」、『現代思想』、33-7号、2005年6月、144～147頁。
- ⑮ノーマ・フィールド、『小林多喜二——21世紀にどうよむか』、岩波新書、134～147頁。
- ⑯島村輝、前掲書、254頁。
- ⑰島村輝、前掲書、256頁。
- ⑱島村輝、前掲書、262～263頁。
- ⑲ノーマ・フィールド、前掲論文。
- ⑳ノーマ・フィールド、前掲書、142頁。
- ㉑ノーマ・フィールド、前掲書、144～145頁。
- ㉒黄奉模、「小林多喜二『一九二八年三月十五日』」、『千里山文学論集』、61巻、1999年3月、219～254頁。
- ㉓初出から現在「一九二八年三月十五日」が収録されている全集にいたる過程については、黄奉模、「小林多喜二『一九二八年三月十五日』」、『千里山文学論集』61巻、1999年3月、37～46頁。『小林多喜二全集』、新日本出版社、1982年の第2巻の巻末の解題を参考にした。534～543頁。
- ㉔『全集』第2巻、538頁。解題の記されている作者注の内容は次のとおりである。「このX月X日を忘れるな、という文句は小樽には歴史的な意味をもっている。尼港—ニコライエブスクーの「残虐」！の時の、壁の血書——五月二十四日を忘れるな、という文句が深く皆の頭に沁み込んでゐるからである。」
- ㉕「一九二八年三月十五日」の初出『戦旗』1929年12月号、29頁。

②⑥「一九二八年三月十五日」『全集』第2巻、180頁。

②⑦『全集』第2巻、541頁。

②⑧島村輝、〈身体〉の〈語り〉／〈空間〉の〈言説〉——「一九二八年三月十五日」の〈語り〉と〈言説〉、『近代小説の〈語り〉と〈言説〉』、有精堂、1996年、参考は『臨界の近代日本文学』、世織書房、1999年、267～290頁。

②⑨『全集』、第5巻、388～391頁。

* 討議要旨

谷川恵一氏より、小林多喜二全集の本文としてレジュメの中で提示された部分は、1929年の日本プロレタリア作家叢書第二篇『蟹工船』所収本文と変わっておらず、結果的には発禁になるものの、ある程度流布している本文とほぼ同じであるという点をどう考えるのか、そしてどの段階で蔵原の指摘が妥当性を失うと見ているのか、すなわち『蟹工船』所収段階で蔵原が指摘した「芸術的欠陥」は克服されているのか、それとも発表者が問題とした「付記」の部分があれば蔵原の指摘は妥当でないと考えるのかを確認したいとの発言があった。発表者は、蔵原の批判は1928年11月・12月『戦旗』に発表された本文に対するものだと回答し、谷川氏は、それでは『蟹工船』所収本文には当てはまらないのかと尋ねた。発表者は、蔵原が批評した時点では一般読者は作品を読むことができず、『戦旗』を配布された読者に対象範囲が限定されているので、この段階において「芸術的欠陥」という評価は少し厳しすぎたのではないかと考えを示した。更に谷川氏は、最後の「付記」には難しい問題があったと思うが、当時の日本共産党の闘争方針に沿った批判と似通っており、それにより芸術性や多元性が回復されると考えてよいのかと質問した。発表者は、一面的や多面的という概念をどう規定するかの問題だと考えるが、『戦旗』に発表された初出のテキストでは多くの削除と伏字が施されているので、その本文を読む読者は、渡がなぜ英雄主義的行動をとったのか、その理由を想像しにくいのではないかと、後の全集本文にも「付記」は掲載されていないが、元の原稿のままであれば多面的な渡像がある程度読者に伝わったのではないかと考えを示した。谷川氏は、当時は自己検閲も含めて、自由に作品が発表できない状況があったことを踏まえ、当時の批評をすべて否定し、時代状況が異なる時に作者が書いたものには当てはまらないといった一般論に陥らないように留意して論を進めていく必要があるだろうとの感想を述べた。これらの討議を踏まえ、最後に司会者より、多面性が具体的にどのようなものが提示され、多喜二の原稿のままの本文テキストのどの部分に同時代からは否定された芸術性が見出されるのかについて今後検証が重ねられることにより、今回の発表は論として完成するのではないかとの見方が示された。